

印、賜唐新印、曰奉國契丹之印

と記せり、此の事件は舊唐書同傳によれば會昌二年九月の事にして、冊府元龜〔二三三二〕も舊書に據りたるが如く、全く同一の文を載せたり。

一方回鶻と奚との關係は更に長く繼續したるが如く、烏介可汗の死後遏捻可汗繼ぐや、衰殘の回鶻は其の糧を奚に得て大中元年に至りしこと、下に述ぶるが如し。

偕て烏介可汗が黑車子に投じたる時には、既に殺胡山の戰に「斬首萬級、生擒五千」〔二三三三〕と記され、又は「降特勒以下衆數萬」〔二三三四〕と記さるゝ大敗を蒙りたる後なれば、那頡曷の殺され、啞沒斯の降りたる當時、部下猶十萬と稱せられたるに比すれば、遙に勢力を失ひたるものなりしなるべきは疑無けれど、然も會昌三年三月武宗が黠戛斯可汗に賜〔二三五〕ひし書中に「回鶻殘衆不滿千人、散投山谷」とあるは、其の真相を傳へたるものには非ず、何となれば舊唐書廻紇傳に、此の後烏介可汗の殺さるゝ前間も無き時に於ける衰退の情態を書きて、「衆十萬、所存止三千已下」と曰ひ、新唐書同傳も「留者皆飢寒、痕夷裁數千」とし、又烏介に繼ぎし遏捻可汗の時、舊唐書廻紇傳には「有衆五千以上」とし、新書同傳も「遏捻可汗、衰殘部五千云々」と記せるによりても、當時敗殘の兵がたゞ千人に満たざる小數なりしとは考ふ可らずして、尙唐の邊疆を威嚇するに足るべき勢を有したるものなるべきを推し得るを以てなり、さればこそ唐は此の後も之を滅絶して後患を斷たんが爲に甚だ力を用ゐたるものにして、烏介可汗が往きて黑車子に依るや「詔弘順・清朝窮蹶」〔二三三六〕と記され、七月には「令幽州、乘秋早平回鶻」〔二三三七〕と曰ひ、又「詔黠戛斯、出兵攻」〔二三三八〕